

「あいみょん」『マリーゴールド』における

ロマンティズムを超克するリアリズムの在りよう

——「スピッツ」『チェリー』との対比にみる

ロマンティズム性への「やわらかな」反逆——

山田 純

はじめに

本稿は「あいみょん」の『マリーゴールド』を考察対象とする。従来、この歌の歌詞は、作者「あいみょん」自身が、「愛し合ってる2人が昔を懐かしんでるような、現在進行形のラブソング」と述べたように、現在進行形の恋人である「君」と「歌い手」とが、過去の自分たちの日々を回想している歌である、とされる。⁽¹⁾にもかかわらず、作者自身とは異なる第三者による客観的解釈の水準においては、

夏の恋の切なさや甘いノスタルジーを感じさせる、
世代を超えて愛される名曲である。「いつまでも

いつまでも 離さない」と歌い、どうしようもない「切なさ」が感じられる。永遠に続くように思えた恋心にも、必ず終わりは来て、それを知っていながら「いつまでも」と歌う。

というように、それが不可能だとはわかっているけれどもそう願わないではいけない、というロマンティズム的な読解が果たされてきたといえよう。⁽²⁾確かに、「遙か遠い場所にいても 繋がっていたいなあ 2人の想いが同じでありますように」という表現には、一見して不可能を願望せずにはいられないロマンティズム性を看取しかねない要素がある。しかし、「あいみょん」自身が影響を受けたと述べる「スピッツ」の歌詞と比較すると

き、⁽³⁾ そのようには読めないことを本稿では実証する。

実際に、「あいみょん」は楽曲制作に際して、「スピッツ」からの影響が大きいと述べる。であるならば、「あいみょん」は自身の楽曲を鑑賞するに際して、聴衆が「スピッツ」を想起することを否定していない、ということになる。なれば、同じ「花の名前」をタイトルとした楽曲でありつつ、かつ冒頭のコード進行を同じくする「スピッツ」の『チェリー』という楽曲は、⁽⁴⁾ 「あいみょん」としてはこれを参照しながら『マリーゴールド』が受容されることを前提として覚悟している、ということになる。つまり、『マリーゴールド』は、その読解に際して『チェリー』を相互参照環境に置くことでこれを想起しつつ鑑賞することを求めているのである。なれば、一方では『チェリー』を参照した場合の読解も果たされねばなるまい。

1、問題の所在

まず、「あいみょん」の『マリーゴールド』の歌詞を⁽⁵⁾ 掲出する。

風の強さがちよつと 心を揺さぶりすぎて
真面目に見つめた 君が恋しい
でんぐり返しの日々 可哀想なふりをして
だらけてみたけど 希望の光は
目の前でずっと輝いている 幸せだ

麦わらの帽子の君が 揺れたマリーゴールドに似てる
あれは空がまだ青い夏のこと
懐かしいと笑えたあの日の恋
「もう離れないで」と 泣きそうな目で見つめる君を
雲のような優しさでそつとぎゅつと
抱きしめて 抱きしめて 離さない

本当の気持ち全部 吐き出せるほど強くはない
でも不思議なくらいに 絶望は見えない
目の奥にずっと写るシルエット 大好きさ

柔らかな肌を寄せあい 少し冷たい空気を2人
かみしめて歩く今日という日に何と
名前をつけようかなんて話して

ああ アイラブユーの言葉じゃ
足りないからとキスして

雲がまだ2人の影を残すから
いつまでも いつまでも このまま

遙か遠い場所にいても 繋がっていたいなあ
2人の想いが 同じでありますように

麦わらの帽子の君が 揺れたマリーゴールドに似てる
あれは空がまだ青い夏のこと
懐かしいと笑えたあの日の恋

「もう離れないで」と 泣きそうな目で見つめる君を
雲のような優しさでそっとぎゅっと
抱きしめて離さない

ああ アイラブユーの言葉じゃ
足りないからとキスして

雲がまだ2人の影を残すから
いつまでも いつまでも このまま

離さない いつまでも いつまでも 離さない

以上が、歌詞の全文である。「あいみょん」は、公式サイト「BIOGRAPHY」によれば、一九九五年生まれの兵庫県西宮市出身のシンガー・ソングライターである。^⑥二〇一五年三月に「貴方解剖純愛歌〜死ね〜」でオリコンインディーズチャートトップ10入りを果たしてインディーズデビューを飾った。二〇一八年八月八日に五番目のシングル『マリーゴールド』をリリースする。Billboard JAPAN Hot 100

アーティスト・ランキング“TOP ARTISTS”にて二〇一九年上半年（18/11/26～19/5/26）首位を獲得し、同年上半年Streaming SongsランキングTOP 4を独占する（表1）。^⑦十二月には「Billboard二〇一九年間TOP ARTISTS」を獲得、「オリコン年間ストーリーミングランキング2019」でも1位を記録し、同年に1番聴かれたアーティスト

表1 2019年上半期ストーリーミングランキング

	曲名	アーティスト
1位	マリーゴールド	あいみょん
2位	今夜このまま	あいみょん
3位	君はロックを聴かない	あいみょん
4位	白日	KingGnu
5位	愛を伝えたいだとか	あいみょん

ト」となった。二〇二〇年二月に『マリーゴールド』のストーリーミング再生回数が2億回を突破（ビルボードジャパン調べ）⁽⁸⁾している。

このように、「あいみょん」は二〇一九年を代表するアーティストであり、その中核は『マリーゴールド』という作品である、ということになる。当然、考察の価値もない泡沫作品などではなく、少なくとも二〇一九年の日本を代表する楽曲であると位置づけることができよう。すなわち、読解するだけの価値ある作品である、ということになる。

この「あいみょん」は、自身の楽曲制作について、以下のように述べている。

「あいみょんっていうアーティストは、いろんな人への憧れのかたまりと思っているので」⁽⁹⁾

このように、楽曲制作に際しては、過去の作品を参照する姿勢を明言しているのである。その過去の作品において、特に参照されるアーティストが「スピッツ」である、ということである。

初めてお会いしたときは号泣しすぎて何も話せなかったです。すごい影響は受けてるし、「(草野)マサムネさんのDNAが自分の中に0.01ミリグラムで

もあればいいのにな」って思うくらい、常に才能に嫉妬はしています。⁽¹⁰⁾

このように、その影響が現在進行形で「あいみょん」に及んでいることを述べている。そして、その「スピッツ」について、「あいみょん」は以下のように分析している。

「歌詞が夢の中を描いてるものに近いな」なんて思っていて、人間って、夢の中だとありえないことがいっぱい起こるじゃないですか。すごい速さで走れるとか、空を泳いでるとか。スピッツの歌詞って夢の中に近いなと思っていて。浮遊感があるイメージでそこが魅力であるし、もちろん歌声も、総じて。スピッツがバンドをやってくれている、ということが魅力です。⁽¹¹⁾

すなわち、「スピッツ」の歌詞世界は、「ありえないこと」を描く「夢の中」のような世界観を持つ、と述べるのである。つまり、「あいみょん」は、ひとまず「スピッツ」の歌詞世界に「いま、ここ」という現実では不可能であることが可能となる「いつか、どこか」を夢見る世界観の構築を―ロマンティズム性を―読み込みつつ、自身の楽曲制作に活かしている、ということとなる。

しかし—先述したように—、『マリーゴールド』については、すでに失われた「いつか、どこか」にあった恋を求めたりするようなロマンティズムを歌うのではなく、「いま、ここ」で愛し合っている現在進行形の恋を歌っているとするのである。ロマンティズム性の「スピッツ」を踏まえつつ、その正反対の対義的世界であるリアリズムを歌うというのは、果たして可能なのだろうか。いや、困難であろう。

であるならば、むしろ、先掲したように、

永遠に続くように思えた恋心にも、必ず終わりは来て、それを知っていながら「いつまでも」と歌う。

のように、実はロマンティズムを歌っていると読解するほうが適切であるかのように見えよう。¹²⁾

果たして、『マリーゴールド』はロマンティズムを歌うのか、それともリアリズムを歌うのか。そしてそれが二〇一九年を代表したというのであれば、それを考えることは「あいみょん」を受け入れた二〇一九年の日本を考えることにつながるだろう。影響を受けたと明言し、かつコード進行を同じくする『チェリー』と比較しつつ、『マリーゴールド』の歌詞世界を読解してみたい。

2、『チェリー』1番の分析

この歌のタイトルである『マリーゴールド』は、先掲二重傍線部のように「麦わらの帽子」の「君」の比喻として提示される「花名」である。すなわち、決して花それ自体を歌う内容にはなっていない、ということになる。なれば、ここで題名「マリーゴールド」が指示する想起内容は—すなわちこの歌詞世界の中核は—、「花それ自体」ではなく「麦わらの帽子」以下の歌われる季節「夏」に関わってくるということになる。

このように、歌詞に登場する花名が、歌われる季節を想起指示するのは、「スピッツ」の『チェリー』に共通している。「喩」としての花を曲名とする共通性と、のみならず冒頭のコード進行を共通させるのが『マリーゴールド』と『チェリー』の関係である。そしてそれだけでなく、その内容をも『チェリー』と共通させるものが『マリーゴールド』にはある。以下、『チェリー』全文を掲載する。¹³⁾

君を忘れない 曲がりくねった道を行く
産まれたての太陽と 夢を渡る黄色い砂
二度と戻れない くすぐり合って転げた日
きつと 想像した以上に
騒がしい未来が僕を待つてる

「愛してる」の響きだけで 強くなれる気がしたよ
ささやかな喜びを つぶれるほど抱きしめて

こぼれそうな思い 汚れた手で書き上げた
あの手紙はすぐにでも捨てて欲しいと言ったのに
少しだけ眠い 冷たい水でこじあけて

今 せかされるように
飛ばされるように 通り過ぎてく

「愛してる」の響きだけで 強くなれる気がしたよ
いつかまた この場所で 君とめぐり会いたい

どんなに歩いても たどりつけない
心の雪でぬれた頬①

悪魔のふりして 切り裂いた歌を
春の風に舞う花びらに変えて②

君を忘れない 曲がりくねった道を行く
きつと 想像した以上に
騒がしい未来が僕を待つてる

「愛してる」の響きだけで 強くなれる気がしたよ
ささやかな喜びを つぶれるほど抱きしめて
ズルしても真面目にも生きてゆける気がしたよ
いつかまた この場所で 君とめぐり会いたい

「愛してる」の響きだけで 強くなれる気がしたよ」という『チェリー』の歌詞に対して、『マリーゴールド』は「アイラブユーの言葉じゃ足りないからとキスして」と応答するのである。すなわち、『チェリー』がそれ「だけ」で十分と位置づけた「愛してる」という「言葉」に対して、「それだけでは足りない」と応えるのである。これもまた、両者の関係性を構築する要素となろう。すると、関係性を確立する両者は、一度は対比的に読解される必要があるのではないか、ということなろう。なれ

ば、『マリーゴールド』が関係性を構築する『チェリー』の内容把握から始めなければなるまい。

この楽曲のタイトルである『チェリー』もまた花名である。歌詞の中で花が登場するのは、「春の風に舞う花びら」のみである。なれば、この歌もまた花それ自体を歌ったものとはなりえない。確かに、この歌にはこの「春の風に舞う花びら」が歌詞の中核にあると見込まれる部分がある。ただし、その「花そのもの」を歌っているわけではないことは、この「春の風に舞う花びら」という一箇所にしかならず「花そのもの」が登場しないことから明らかである。花そのものを主題とした歌でないのであれば、花名は別のものを指すことになる。すなわち、「春の風に舞う花びら」は、歌詞の中で何らかの「比喩表現」となっていることが推察される。なれば、「春の風に舞う花びら」の意味を説明することこそが、この「チェリー」の解釈に不可欠であり、ひいてはそれをタイトルとする楽曲『チェリー』を理解することになる。まず、「春の風に舞う花びら」は、具体的にどのような「花名」でありえるのか。歌詞内部において、詳細な説明なしに歌われて共有される花の種類であるのだから、説明がなくとも「春の花」としてイメージできる最

大公約数の花、おそらく題名の通り「桜（チェリー）」となるだろう。すなわち、この歌が歌われる「今」は、桜の花が散る季節なのである。

その「桜の花が散る」季節に、二度と戻ることのない日について回想するのが1番の歌詞世界ということになる。回想できるということは、そこに時間的断絶がある、ということである。というのは、その「桜散る春」に「二度と戻れない」「日」として「回想」可能の状態になるためには、「桜散る春」が過去と未来を「区切る」ことになる。「境界線上」になっているためである、と考える他ないからである。すなわち、回想する契機としてはたらく「過去」「現在」「未来」とを区切るポイントに立つがゆえに、区切られてしまった「過去」にはもう戻れないと歌うのである。それゆえに、過去のこととして「回想」が可能なのである。

なれば、「桜の花散る」季節の「区切り」であるその「日」とは、「卒業式」を意味することになる。つまり、この歌は、桜散る春の卒業式において、過去の（おそらく高校生活）を回想している歌なのである、ということができよう。

となると、ここで歌われる「君を忘れない」「二度と

戻れない」日々とは、君と恋に落ちていた日々である、ということになる。その「君」から「愛してる」と言われたことについて回想し、それを大事に抱きしめている歌なのである。要約すると、以下のようなろう。

（卒業式の日、思い出される君との恋の日々、その君を忘れない）

（卒業後、これから）曲がりくねった道を行く（このように）

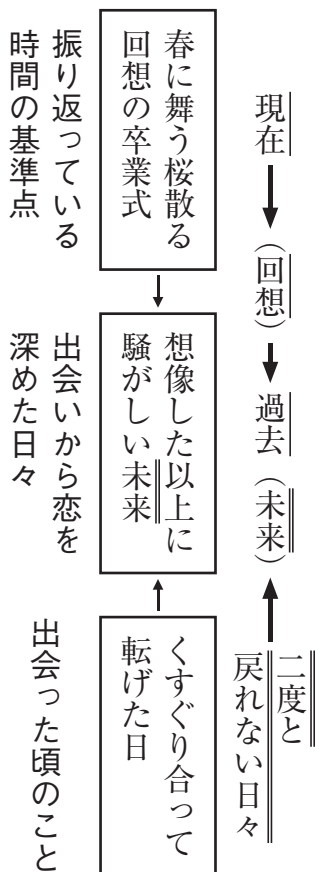
（そうした旅立ちの日の僕はまるで）産まれたての太陽（のような出発の夜明けである）

と（これと対比すれば、過去の君との恋はまさに）

夢を渡る黄色い砂（のと同じ黄色でも新しい太陽と比べ砂のように儚く吹き散らされてしまう）

だとすると、1番で歌われる「きつと想像した以上に騒がしい未来が僕を待ってる」という内容を、卒業式後の、すなわち高校卒業後の「未来」を意味していると読解するのは不可能となる。「二度と戻れない」として、断絶と喪失を強く意識する過去の君との恋、この楽しかった部分だけを思い出して歌うことが、どうして輝かしい卒業後の未来を期待する楽観的な心を導くというのか不審となるためである。なれば、意味しているのは、

「二度と戻れない くすぐり合って転げた日」を回想している文脈上に置かれている「未来」である、ということになる。すなわち、1番のサビ部分は、全体が回想部分なのである。であるから、ここという「未来」は、「二度と戻れない くすぐり合って転げた日」から始まり、そしてそれを包摂する、高校時代の「君」と出会って恋に落ちた過去の瞬間から見た、「君」と恋をしていた期間全体という「未来」である。要は、例えば高校三年の春に「くすぐり合って」恋に落ちたとするならば、高校三年の夏の「騒がしい」恋愛関係こそが、その出会いの春から見た「未来」なのである。他方でそれは高校三年の卒業式から見れば、「そのとき想像していたよりずっと騒がしかった」過去のことである。



歌詞の回想時点から見れば、すべては過去のことなの

である。それらの過去を総合的に振り返って回想しているのがAパートである、ということになる。そしてその「騒がしい未来」の日々（過去の恋の日々）において、「君」から伝えられた「愛してる」を回想して、「そのとき」、強くなれると確信したのである。確信したのに、結局は――後で見ると強くなれなかったために、この恋を失うのである。むろん、その「愛してる」を大事に抱きしめているのも、恋に落ちていた「過去」の日々である。これが1番の歌詞世界となる。

3、『チェリー』2番の分析

1番に続き、その回想の途上で、「騒がしい未来」君と恋に落ちていた日々」での詳細なエピソードが2番の歌詞の内容となる。その日々に、「手紙」を書いていたというのである。その内容は、「こぼれそうな思い」であるという。その手紙を「捨てて欲しい」というのであるから、秘めておいて欲しい内容の手紙である、ということになる。あるいは手紙という形として永続して欲しくない、ということであろうか。いずれにしろ、このあたりから、歌詞は難解になってくる。注意深く検

討していこう。

こぼれそうな思い 汚れた手で書き上げた
あの手紙はすぐにでも 捨てて欲しいと言ったのに
少しだけ眠い 冷たい水でこじあけて
今 せかされるように
飛ばされるように 通り過ぎてく

ここは、「こぼれそうな思い」を書き連ねた手紙について歌うパートである。続く傍線部は、一見するともう少し眠っていたいけれど仕方なく冷たい水で顔を洗って目を覚まして仕事に向かう日々に追われていることを歌うように見える。しかし、そもそも『チェリー』の歌詞世界の基準となる時間軸は、先に見たように桜散る季節を境界とした「回想の中の過去」と、――後述するような――それと対比される「予想される近未来」であって、実際にその渦中に身を置く実質的な経験としての「労働者の現在」という要素は皆無である。なれば、この時間軸の飛躍は突飛である、ということになる。むろん、歌詞であるならばこのような飛躍はあり得よう。しかし、歌い手は「通り過ぎてく」と、それ自体を眺める立場に立つ。実際に仕事に翻弄される労働者の現在を同時代的にその

渦中にありながら眺めているというのは分裂している。そのような強硬な読解を選ぶよりは、何が「通り過ぎている」のを眺めているのかを考える方が適切であろう。

通り過ぎているのは、せかされるように、飛ばされるように「振る舞う」何かである。その何かは、あたかも「もう少し眠っていたいけれど仕方なく冷たい水で顔を洗って動き出す」ように、振る舞う何かであろう。すなわち、「少しだけ眠い 冷たい水でこじあけて」は、比喻表現であるということになる。動きたくないけれど仕方なく緩やかに動き出し、今や反転してせかされるように飛ばされるように眼前を通り過ぎていくものを、歌い手は眺めているのである。

当然、直前のパートで捨てて欲しいと願った「手紙」が歌われるのであり、かつこのパートの主語は「手紙」以外に現れない。主格の助詞が使われるのは「手紙」だけであるためである。であるから、その手紙が飛ばされていくのを眺めている、ということになる。あるいは、歌詞全体で風に飛ばされるものを挙げるならば、それは「花びら」という微細なものである。これと比べれば、それを吹き散らす風と、便箋全体を吹き飛ばす風とは質的に異なる風を想定しなければなるまい。むしろ、動

かなかったものが緩やかに動き始め、やがて吹き散らされていくというのだから、「手紙」として主語を担保しつつより微細な何かが飛ばされると考える方がよい。すなわち、手紙は手紙であつても、切り裂かれた手紙の紙片のほうが良い、ということである。しかし、歌詞の中に手紙を捨てた／切り裂いたという表現は存在しない。「すぐにでも 捨てて欲しいと言ったのに」とはあつても、「のに」と「逆接」されているためである。それが逆接されているならば、手紙それ自体は破り捨てられてはいないのである。

2番の歌詞内容をもう少し解明するために、2番の後の大サビ部分に注目しよう。

どんなに歩いても たどりつけない
心の雪でぬれた頬①
悪魔のふりして 切り裂いた歌を
春の風に舞う花びらに変えて②

傍線部①に、「どんなに歩いても たどりつけない 心の雪でぬれた頬」とある。「雪」は「冷たい液体」の暗喩であろう。それが頬を濡らすとするならば、それは涙であり、その涙は「心の雪」のようであるというのだから、

冷たい心によって流された涙であるということになる。

「チェリー」という「桜」、すなわち「桜散る春」において回想している瞬間から始まる歌としては、この「雪」は「冬」のイメージを生成して、「春」と対比的な効果を生じせしめよう。すなわち、1番の歌詞世界と対比的に、2番を、春から見た過去の冬と位置づけるのである。すなわち、この『チェリー』は春と冬という対比構造であることが、2番の後の大サビ部分によって明示されるのである。

であるならば、2番は「くすぐり合って転げた日」と対比的にある、ということになる。すなわち、恋に落ちていた日々との対比となる、これが2番の全体的内容となる。なれば、別れの季節であった、ということである。ゆえに、その恋は「二度と戻れない」のである。

よって、2番のサビは、1番と全く同一でありながら、置かれている文脈が正反対である、ということになる。置かれている文脈が正反対であれば、その意味が変容することになるだろう。すなわち、「少しだけ眠い 冷たい水でこじあけて 今 せかされるように 飛ばされるように 通り過ぎてく」「愛してる」の響きだけで 強くなれる気がしたよ」は、この冬に対比される別れの季節

に至った経緯を歌っている全体的内容をもつ、この観点から分析する必要がある、ということになる。

まず、「今 せかされるように 飛ばされるように 通り過ぎてく」ものが何なのか、これが明らかになれば、2番の意味が垣間見えてくるのではなからうか。これについても、2番の後のパートから見ていこう。

その冬に、「悪魔のふりして」、「歌」を「切り裂いた」という。ここで、それまで登場しなかった「歌」が登場する。なれば、眼前を通り過ぎていく切り裂かれた何かはこの「歌」ということになる。この「歌」が何を指すのか。この「チェリー」では、一切の説明がない。この「歌」を説明なしに歌うことを「スピッツ」は良しとしているのであれば、それは唐突に過ぎよう。ここは、説明がなくともこの「歌」が何を意味するか誰でも理解できるから説明をしないと見る方が適切である。すなわち、この「歌」は、「スピッツ」の作品世界においては説明なしに理解可能である、ということになる。

そこで、「スピッツ」作品の歌詞における「歌」の用例を探ってみよう。『チェリー』と並び広く知られる『ロビンソン』から「歌」の用例を拾ってみたい。¹⁴⁾

新しい季節は なぜかせつない日々で
河原の道を 自転車で 走る君を追いかけた
思い出のレコードと 大げさなエピソードを
疲れた肩にぶらさげて しめつら まぶしそうに
同じセリフ 同じ時 思わず口にするような
ありふれたこの魔法で つくり上げたよ

誰も触れない 二人だけの国
君の手を離さぬように

大きな力で空に浮かべたら ルララ 宇宙の風に乗る

片隅に捨てられて呼吸をやめない猫も
どこか似ている 抱き上げて
無理やりに頬よせるよ

いつもの交差点で 見上げた丸い窓は
うす汚れている ぎりぎりの三日月も僕を見てた
待ちぶせた夢のほとり驚いた君の瞳
そして僕ら今ここで生まれ変わるよ
誰も触れない 二人だけの国

終わらない歌ばらまいて

大きな力で空に浮かべたら ルララ 宇宙の風に乗る
大きな力で空に浮かべたら ルララ 宇宙の風に乗る
ルララ宇宙の風に乗る

ここで、「終わらない歌ばらまいて」という一節に
「歌」の用例を見ることが出来る。ここで歌われている
のは、「誰も触れない二人だけの国」で「歌」が歌わ
れている、ということである。なれば、この「歌」は、
この「国」で「二人」によって歌われるものである、と
いうことになる。この「国」が、どのような国かといえ
ば、それは「つくり上げ」られた「国」である。では、
その「国」がどのようにつくり上げられたかといえ、
それは「ありふれた魔法」によってつくられたというこ
とになる。その「ありふれた魔法」とは何か。それは、
「同じ時」に「思わず口に」した「同じセリフ」、これが
「魔法」である、というのである。

その「魔法」が作り上げた「国」において、「二人」に
よって歌われる「歌」とは、「同じセリフ」を「同じ時」
に「口に」する、言葉そのものである、ということにな
る。恋人たちの語り合う言葉、これを「歌」と見做して
いるのである。それこそが、『ロビンソン』における「歌」

の意味である。

もうひとつ、用例を見ておこう。『渚』である。⁽¹⁵⁾

ささやく冗談でいつも つながりを信じていた
砂漠が遠く見えそうな時も
ぼやけた六等星だけど 思い込みの恋に落ちた
初めてプライドの柵を越えて

風のような歌 届けたいよ

野生の残り火抱いて素足で走れば

柔らかい日々が波の音に染まる 幻よ 醒めないで

ねじ曲げた思い出も捨てられず生きてきた

ギリギリ妄想だけで 君と

水になつてずっと流れるよ

行きついたその場所が最期だとしても

柔らかい日々が波の音に染まる 幻よ 醒めないで

渚は二人の夢を混ぜ合わせる揺れながら輝いて

輝いて… 輝いて…

柔らかい日々が波の音に染まる 幻よ 醒めないで
渚は二人の夢を混ぜ合わせる揺れながら輝いて

ここでは、「風のような歌」という用例を見ることができる。この『渚』における「歌」もまた、「思い込みの恋に落ちた」「君」に届けたい何かである、という。その恋は「幻」でもあるという。その「幻」を「醒めない」で欲しいと願うということは、その「恋」は淡いものであるということになる。それは、「つながり」を「信じていた」という程度の淡さなのである。なれば、淡くとも「信じる」根拠になっていたものがあるだろう。そこそが、「ささやく冗談」なのである。なればその「幻」を「醒めない」ままにするためには、歌い手は「つながり」をつなぎ止め続けなければならない。すなわち、「冗談」を交わしあい続ける必要があるのだ。したがって、ここでの「歌」もまた、君との間で交わされる言葉の数々と見做しうる、ということになる。そして、この「風」こそがこの歌の中核として機能している。⁽¹⁶⁾

以上、見てきたように、スピッツにおける「歌」は、恋人たちが交わす言葉の数々である、と見做すことができる。

であるならば、『チェリー』が何の説明もなしに、その冬に「悪魔のふりして」、「切り裂いた」ものが「歌」であるとするならば、それは君と交し合った言葉を切り裂いた、ということになる。ここで「君と交わした言葉」とは、一見すると、「こぼれそうな思い」を「書き上げた」「手紙」であるということになる。なれば、その「手紙そのもの」を破り捨てたことを予想させる歌詞なのだ、と解釈してしまう恐れがある。

しかし、それは捨ててほしいと歌い手側が願ったのであるから、切り裂かれるのは本望であろう。ただし、「捨てて欲しい」と言った「のに」と「逆接」される点が重要である。逆接されるからには、「君」は捨てなかったということになる。なれば、ここである「君と交わした言葉」の内容とは何か。決して「手紙そのもの」ではないとするならば、それは何か。手紙それ自体を切り裂いたのではなく（それは望んでいたこと）、その「君と交わした言葉」を切り裂いたとするならば、それは「手紙」に書かれた内容、すなわち「こぼれそうな思い」なのではなからうか。

その「思い」の内実について、君と交し合った言葉として歌詞に提示される中から探すならば、それは2番の

サビの「愛してる」である。なれば、2番の「愛してる」は、1番のそれ―君が言ってくれた嬉しい言葉―とは異なる意味を生成する。同じ歌詞でありながら、正反對の文脈に置かれることで、作り上げている意味もまた正反對の異なりを見せ始めるのだ。すなわち、歌い手側の「手紙」によつて「君」に伝えた、歌い手側からの「愛してる」という言葉なのである。

この「言葉」を、「悪魔のふりして」、すなわち「人ではない」ふりをして「君」が「切り裂いた」結果、その「言葉」の断片は解体されて、眼前の桜の花びらと同じように「せかされるように」、「飛ばされるように」、過去のものとなって吹き散らされていくのである。そのように歌い手は「花びら」のように「変えて」と強く願うのである。せめて美しく散っていつて欲しい、と。すなわち、歌い手側の「愛してる」は、「君」にとっては「強く」なるための言葉とならなかったのであろうと強く推測している、ということになる。それはなぜか。それは「君」が「冷たい心が流した涙が頬を濡らす」ためである。その原因は何か、歌い手にはわからない。「君」の「心」には、「どんなに歩いても たどりつけない」ためである。

そうであるとき、2番のサビ全体は、この歌い手側によつて書かれた手紙の「内容（愛してるの響きだけで強くなれる気がしたよ）」である、ということになる。

歌い手の手紙

「愛してる」の響きだけで 強くなれる
気がしたよ いつかまた この場所で
君とめぐり会いたい

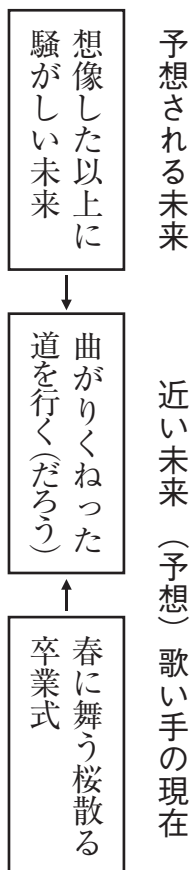
その手紙の「言葉」は、桜の花びらがゆるやかな風によつて行きつ戻りつしながらも、やがて強い風で一斉に飛ばされて通り過ぎていくように吹き散らされていく。そうであるとき、「いつかまた この場所で 君とめぐり会いたい」が意味するのは、毎年必ず同じ季節に咲き誇っては散っていく桜に重ね合わされた出会い―あのときの君との出会いを生まれ変わっても何度でも繰り返したいくらい、愛してる―、ということになる。実際に、現実的未来で大人になった二人が桜の木の下で十年後に「再会したい」という意味ではないのである。

このように、『チェリー』は、1番と2番とで、全く同じ語句を歌詞として繰り返しながら、その意味が異なる作品である、ということになる。なれば、3番の歌詞も意味が異なる、ということになる。

4、『チェリー』全体の読解

君を忘れない 曲がりくねった道を行く きつと
想像した以上に 騒がしい未来が僕を待ってる

3番のこの箇所における「未来」とは、1番のそれと異なり、まさに文字通りの未来、すなわち高校卒業後の「未来」となる。過去の君との恋を忘れない。忘れないで、これからの道を行こう、そう卒業式に歌い手は歌うのである。そのときの未来は、「恋に落ちた日から始まる未来（恋を続ける日々）」という高校時代の過去ではなく、高校卒業後の未来である。過去の桜の季節と現在のそれを重ねて、同じようにその時点では予想することができない騒がしい未来が訪れるだろうと予想しているのである。



以上のようなとき、以下の歌詞は、その「想像以上に騒がしい未来」を生きようとする歌い手の言葉ということになる。

「愛してる」の響きだけで 強くなれる気がしたよ
(そんなはずはないのに)
ささやかな喜びを つぶれるほど抱きしめて
(それでも、その思い出だけを何度でも回想するこ
とができれば)
ズルしても真面目にも生きてゆける気がしたよ
(今後どのような生き方をしたとしても、きちんと
生きていけるだろう)
いつかまた この場所で 君とめぐり会いたい
(だから、この「思い出の中」の「過去の」君よ、
それほど遠くない未来で、これから何度も思い出の
中に現われて自分を強くして欲しい)

以上のことから、『チェリー』は、一見、過去の恋を
思い出しつつ、また君といつかどこかで「再会したい」
と願うロマンティズム心性を歌う歌なのではなく、こ
れから生きていくための大事な思い出を再確認しつつ新
たに旅立つ者の歌、すなわち「いま、ここ」に立って未

来を見据える強力なリアリズムの歌となっているのであ
る。歌詞の要素それ自体は個々にロマンティズム性を
持ちつつも、それらが組み合わされた全体が生成する文
脈では、失った恋を糧として前へ進もうとする心を歌う
リアリズムの内容となっているのだ。

5、『マリーゴールド』の分析

この「スピッツ」を、「あいみょん」はリスpektし
つつ、同じ花名を題名として相互参照可能な歌『マリー
ゴールド』を歌ったのである。歌詞の全文を再掲しよ
う。

風の強さがちよつと 心を揺さぶりすぎて 真面目に見つめた 君が恋しい でんぐり返しの日々 可哀想なふりをして だらけてみたけど 希望の光は 目の前でずっと輝いている 幸せだ	普遍的 「今」
--	------------

麦わらの帽子の君が 揺れたマリーゴールドに似てる あれは空がまだ青い夏のこと 懐かしいと笑えたあの日の恋 「もう離れないで」と 泣きそうな目で見つめる君を 雲のような優しさでそとぎゅっと 抱きしめて 抱きしめて 離さない サビ①	本当の気持ち全部 吐き出せるほど強くはない でも不思議なくらいに 絶望は見えない 目の奥にずっと写るシルエット 大好きさ	今
柔らかな肌を寄せあい 少し冷たい空気を2人 A かみしめて歩く今日という日に何と 名前をつけようかなんて話して	今	回想過去 (夏①)

あぁ アイラブユーの言葉じゃ 足りないからとキスして 雲がまだ2人の影を残すから いつまでも いつまでも このまま	遙か遠い場所にいても 繋がっていたいなあ 2人の想いが 同じでありますように	今
麦わらの帽子の君が 揺れたマリーゴールドに似てる あれは空がまだ青い夏のこと 懐かしいと笑えたあの日の恋 「もう離れないで」と 泣きそうな目で見つめる君を 雲のような優しさでそとぎゅっと 抱きしめて離さない サビ③ あぁ アイラブユーの言葉じゃ 足りないからとキスして 雲がまだ2人の影を残すから いつまでも いつまでも このまま	未来Ⅱ夏②	

離さない　いつまでも　いつまでも
離さない

普遍的「今」

この歌詞世界もまた、1番のサビ①と3番のサビ③が同語句の繰り返しでありながら、その持たされている意味に変化がある歌となっている。それが『チェリー』との対応関係にあるかどうか、確認されるべきである。

まず再確認したいのは、同じように花名がタイトルでありながら、それは比喻として機能している点で共通する点である。また、「愛してる」の響きだけで 強くなる気がしたよ」に対して、二重傍線部「アイラブユーの言葉じゃ足りないからとキスして」として、『チェリー』に応答する歌詞が見られる。すなわち、愛してるという言葉だけでは足りないのだ、だから、という歌詞世界を構築するのが『マリーゴールド』なのであるという点である。なれば両者は対比可能な相互参照環境に置かれているということになる。少なくとも、「あいみょん」はその相互参照可能性を否定していないのである。つまり、どうぞ比べて鑑賞してください、というわけである。

なれば、『マリーゴールド』が「麦わら帽子」の「夏」

を表しつつ、傍線部Aの「柔らかな肌を寄せあい 少し冷たい空気を2人」という、冷たい季節との対比を示す機能もまた、対比関係にあると見てよいだろう。すなわち、二つの季節を対置する歌詞世界をもつ歌としても共通する、ということになる。すると、1番の「夏」と、2番の「冷たい空気」の季節には、時間的な前後関係があり、どちらかがどちらかの因果関係―『チェリー』ではまず冬の別れが契機となって春の回想を導いた―があるということになる。

風の強さがちよつと　心を揺さぶりすぎて
真面目に見つめた　君が恋しい
でんぐり返しの日々　可哀想なふりをして
だらけてみたけど　希望の光は
目の前でずっと輝いている　幸せだ

冒頭は、ある契機によって「君」を見たことを歌う。その「君」は「希望」であるという。そして、この瞬間を幸せだ、というのである。歌詞の文法的な時制も現在形であることを合わせて考えれば、これは「歌い手の今」のことを歌っている、ということになる。しかし、

麦わらの帽子の君が

揺れたマリーゴールドに似てる

あれは空がまだ青い夏のこと

懐かしいと笑えたあの日の恋

「もう離れないで」と

泣きそうな目で見つめる君を

雲のような優しさでそつとぎゅつと

抱きしめて 抱きしめて 離さない

と続くのである。すなわち、この『マリーゴールド』において、Aパートとサビの間には時制のズレがある（後述）。つまり、現在進行形の「恋」を「あの日の恋」と区切ることはできない。であれば、ここでの「あの日の恋」は区切ることでできる「過去の恋」ということにならざるを得なくなる。¹⁷そして、その「恋」の季節であった「夏」も過去のことと捉えざるを得なくなる。

なれば、先の「冷たい空気」の季節はこの夏の後ということになる。その「冷たい空気」の季節に先立つ「夏」において、「もう離れないで」と「君」は言い、僕は「君」を抱きしめて離さないと誓ったのだ、あの夏に、ということになる。

本当の気持ち全部 吐き出せるほど強くはない

でも不思議なくらいに 絶望は見えない

目の奥にずっと写るシルエット 大好きさ

しかし、その「君」のシルエットは、今や「シルエット」なのである。すなわち、実物ではないのである。実物に「大好き」と告げているわけではないのである。どうして「君」の「影」を「大好き」と思う状況になったのか、については、その原因が「本当の気持ち全部はき出せるほど強くはない」ことであつたかのように提示されている。しかし、その内実は、ここまででは不明である。そしてその状況を「絶望」ではないという。なぜか。

柔らかな肌を寄せあい 少し冷たい空気を2人

かみしめて歩く今日という日に何と

名前をつけようかなんて話して

ああ アイラブユーの言葉じゃ

足りないからとキスして

雲がまだ2人の影を残すから

いつまでも いつまでも このまま

「柔らかな肌を寄せあ」うのは、「冷たい空気」に対する対比効果で、その季節の寒さを強調する。その冷たい空気を「かみしめて歩く」ということは、「冷たい空気」を強く意識しながら歩いている、ということになる。互いの体温を感じながら歩けるはずの状況において、互いの体温の温かさではなく、「冷たい空気」を意識せざるを得ないのである。そのような状況の「今日」を、何と呼んだらいいのか、ということと話しているという。このあたりは『チェリー』と同じように難解な展開である。

傍線部「雲がまだ2人の影を残すから いつまでもいつまでも このまま」は、「残って」いるのは「2人」の「影」だけなのである、という点に注目すべきである。その「影」を「いつまでも このまま」にしておいて、と歌うのがこの部分である。そして、その「影」は、「愛してるの響き」だけでは足りないからと「キス」している2人の影なのだ。その瞬間は雲に焼き付けられているだろうから、どうかそのままと願うのである。すなわち、この「キス」は「冷たい空気」の季節になされたものである。と同時に、「雲」が「まだ」継続して残しているというのであるから、その重なり合う2人の影は、「あの日」に「抱きしめて 離さない」2人の影を今も

保持しているということになる。なれば、この『マリーゴールド』において歌い手が立つ「今」の位置は、「冷たい」季節Ⅱ冬なのである。これは、『チェリー』とは反転していると言わざるを得ないだろう。『マリーゴールド』は1番から回想の中のことで、それは2番の冬の立場から回想されているのである。回想の中の過去の「夏」は、「あの日の恋」と名前をつけることができたけれど、今、この「冷たい空気」に包まれた今日を、今後、何と名付けて回想することになるのだろうか、ということと思うパートなのである。

遙か遠い場所においても 繋がっていたいなあ
2人の想いが 同じでありますように

その「雲」の「影」が抱き合っている限り、その影が残り続ける限り、実物の2人の実際の物理的な距離がどれほど離れていても、繋がりが残り続けますように、と願うパートである。それだけでなく、「想い」まで同じであるように「願望」するのである。その「想い」とは、1番の回想部分を思い出しながら歩く2番で歌われた「想い」であろう。なればそれは、「いつまでも このまま」という「想い」である。今この瞬間の二人の願

いが「いつまでも このまま」で共通していますように、そしてその願望がかなって永遠に一緒にいられますように、と希求するのである。しかし、これは実際には不可能な願望である。それが不可能とわかっていながらも、それでもそう願わずにはいられないのである。ここは典型的なロマンティズム部分ということになる。にもかかわらず、そこに絶望はないというのである。

なればここで、先の「遙か遠い場所」が問題となろう。『マリーゴールド』はここで歌詞世界の仕掛けが機能するのである。「遙か遠い場所」は一見、ロマンティズム性を強く強調する。しかし、単にロマンティズムと言っても、その「遠さ」次第では可能になるのだ。恋する2人にとっては、例えば新大久保駅と大久保駅ほどの距離（400メートル）でも「遠い」かもしれないのだ。しかし、その程度の遠さをロマンティズムと呼ぶことはできない。なれば、歌詞世界における「距離」について考える必要がある。

歌詞の中で物理的な距離をもちつつ、最も遠いところは「雲」である。実は、『マリーゴールド』ではその距離が常に「雲」として集中するようになっていく。その「遠い場所」の「雲」においてですら、「繋がっていたい

なあ」と願うのだ。なれば、その願望は「雲がまだ2人の影を残す」のであるから、すでに達成していることになるのではないだろうか。というのは、その影がずっとそのままであることを願望するその願いが「2人の想い」であり、それが「同じでありますように」と願うのであれば、その願望が達成されるためには、常に2人が抱きしめ合っている状況が必要とされる。2人が重なり合い続けられ、その影は遙か遠い雲に反射して焼き付けられ、繋がりが続けるためである。そうすれば、願いは実現する。歌は最後に全体を繰り返す。

麦わらの帽子の君が
揺れたマリーゴールドに似てる
あれは空がまだ青い夏のこと
懐かしいと笑えたあの日の恋
「もう離れないで」と
泣きそうな目で見つめる君を
雲のような優しさでそつとぎゅっと
抱きしめて離さない

「あの日の恋」から重なり合い雲に焼きつけられる影。抱き合う二人は、冬の今も「柔らかな肌を寄せあい」影

を重ねている。2人を包む冷たい空気のなかで重なり合う2人の影は、あの日の恋から変わることはない。だから、この冬の雲にも2人の影は残るだろう。次の夏も、その次の冬も、たぶんこのまま。だから遙か遠くの未来においてもおそらく回想するであろう「あの日の恋」次の夏／次の冬」においても抱き合っているのではないか。

ああ アイラブユーの言葉じゃ
足りないからとキスして

そして重なり合う2人の影が次の季節の雲に残る。その次の季節の、まだ名前のない日にも2人はキスして、こうしてそれが夏でも、冬でも、2人の影は雲で重なり続けるであろう、

雲がまだ2人の影を残すから
いつまでも いつまでも このまま

おそらく、このような2人の関係は、こうして抱き合うことが続く限り、だいたいにおいて「たぶんこのまま」続いていくのではなからうか、ということになる。それは願望ではなく、現状認識に基づく現在の延長上に予想される近未来に過ぎないのだ。

おわりに

風の強さがちよつと
心を揺さぶりすぎて
真面目に見つめた 君が恋しい
でんぐり返しの日々
可哀想なふりをして
だらけてみたけど 希望の光は
目の前でずっと輝いている 幸せだ

より大きな
普遍的「今」

先に、この部分を「今」のことを歌っている、と述べた。その後で、冬の「今」から回想した夏の日の恋という過去を歌う内容になっていると展開した。しかし、その「あの日の恋」は1番のサビ部分において初めて過去であることが開陳されるのであって、この部分の「今」性は否定されずに残り続ける。最後に、この冒頭の分析を行いたい。

『マリーゴールド』の冒頭は、その表現から見て、「今」を指していると見てよい。その「今」とは、「あの日の恋」のその日の「現在」である。すなわち、「マリーゴールド」のように揺れてる君をみた「夏」の「今」である。

それと同時に「冷たい空気」に包まれて歩く「冬」の「今」でもある。なぜなら、夏であつても、冬であつても、「君」は「希望」であり、「絶望」などをもたらす存在ではないためである。その冒頭とラストの、「離さない　いつまでも　いつまでも　離さない」によつて挟み込まれているのが『マリーゴールド』の歌詞なのである。何を離さないのか、それは「目の前でずっと輝いている　幸せ」であり、「希望の光」なのだ。この「希望の光」は、あたかも夏の「マリーゴールド」のように輝き続けているのである。

すなわち、『マリーゴールド』とは、夏でも冬でも、どのような時であつても、君を離さないままで来たし、なればおそらくこれから離さないのではなからうか、ということを書いた歌なのである。

夏の恋の切なさや甘いノスタルジーを感じさせる、世代を超えて愛される名曲である。「いつまでも　いつまでも　離さない」と歌い、どうしようもない「切なさ」が感じられる。永遠に続くように思えた恋心にも、必ず終わりは来て、それを知っていながら「いつまでも」と歌う。¹⁸

というようなロマンティシズム的な理解は、まるで見当

違いである、ということになる。これ以上ないリアリズムの歌なのである。まさに、現在進行形のラブソングなのである。

なれば、「スピッツ」『チェリー』に応答する形のこの『マリーゴールド』は、「過去の恋の思い出を、力強く生きていくための糧にするとか、おかしいんじゃないの？ でんぐり返しの日々でも、可哀想なふりをする日々でもそれでだらけてしまう日々でも、ずっと幸せな日々なんだよ、今この瞬間の抱擁を積み重ね続けられさ」という内容になっている、ということになる。かつて『チェリー』が喪失してしまったと歌った「過去」を、捨てないでいつまでも抱き続けて失わないでいれば、たぶんこのような「今」がそれなりに持続するだろう、というのだ。『チェリー』が「それでも」と前向きに志向したリアリズムに応答しつつ、「あいみょん」のリアリズムはより強固になっている、と言えよう。その「リスペクト」対象を軽やかに超越していく、いわば「師匠超え」を達成したのが『マリーゴールド』なのである。

阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件によって厳しい現実―リアリズム―と直面した日本が『ロビンソン』を始めとした「スピッツ」によつて支えられながら前進した

ように、災害が続いた二〇一九年においても「あいみょん」は前向きに進もうとするこの国のリアリズムを支えている、ということになろう。とはいえ、現実が厳しいとき、ロマンティズムという幻想に耽っているような余裕はない、ということの裏返しでもあろう。

【注】

(1) 音楽ナタリー「あいみょん「マリーゴールド」インタビュー」(<https://natalie.mu/music/pp/aimyong05> (2020/07/30 閲覧確認))。

(2) 榎本優奈・植田康孝「人工知能を用いた「あいみょん」分析」(『江戸川大学紀要』30号 2020年3月)。なお、本稿で言う「ロマンティズム」の意味は、『事典 哲学の木』(永井均他編 二〇〇二年三月 講談社)の「ロマンティズム」項目(廣瀬玲子担当)に拠る。すなわち、「いま、ここ」を認識して受容する「リアリズム」の対義的意味として設定し得る、「いつか、どこか」を希求する運動とする、という把握である。つまり、本稿でいう「ロマンティズム」とは、「それがあらか

じめ不可能とわかっていながらも希求しないではいけない心性」ということになる。

(3) 「あいみょん…一番好きな曲は2016年にリリースされた『醒めない』という曲。この曲のおかげで「君はロックを聴かない」という楽曲が生まれたと勝手に思っています。」2019年10月15日(火)『SONAR MUSIC』(FEATURE TOPICS J-WAVE <https://news.radiko.jp/article/station/FMJ/36450/> (2020/07/30 閲覧確認))。また、「スピッツの草野マサムネさんが私の神様」(2019年4月14日放送の「関ジャム 完全燃SHOW」4月14日(日) 23時10分〜放送のテレビ朝日系)。チェリー／マリーゴールドのコード進行は、それぞれ、

『チェリー』

Aメロ C | G | Am | Em | F | C | F | G
『マリーゴールド』

Aメロ C | G | Am | G | F | C | F | G
(EマイナーをGで置き換えている)
である。「カノンコード進行を覚えよう」<https://www.youtube.com/watch?v=dWzosB2w1lo>

(2020/07/30 閲覧確認)。

- (5) テキストは(作詞・作曲: あいみょん(ワーナーミュージック・ジャパン(2018年8月8日)))に拠る。
- (6) 「あいみょん OFFICIAL FAN CLUB “AIM”」
「BIOGRAPHY」(<https://www.aimyong.net/feature/biography> (2020/07/30 閲覧確認))。
- (7) 前掲注(2) 榎本論文。
- (8) 前掲注(6) 公式サイト。
- (9) 前掲注(3) サイト。
- (10) 前掲注(3) サイト。
- (11) 前掲注(3) サイト。
- (12) 前掲注(2) 榎本論文。
- (13) テキストは(作詞・作曲: 草野正宗。スピッツの13番目のシングル 1996年4月10日。『RECYCLE Greatest Hits of SPITZ』(ポニーノール 1999年12月15日))に拠る。
- (14) 「ロビンソン」は162万枚のセールスを実現。阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件に揺れる日本で、広く受け入れられる楽曲となった。伊東武彦「スピッツ「不安時代の魔法」―「永遠学生バンド」の秘密 「草食4人組」が空を飛ぶまで」(アエ

ラ 22 卷 4 号 2009 年 01 月 26 日)。テキストは前掲注(13)に拠る。

(15) テキストは前掲注(13)に拠る。

(16) 荒原邦博「渚にまつわるエトセトラ―あるいはスピッツと真心ブラザーズが一九九〇年代半ばにポップスとロックの「波打ち際」にもたらしたものとは何か」(東京外国語大学総合文化研究所紀要『総合文化研究』22号 (2019年2月))。

(17) 前掲注(2) 榎本論文は、「「あの日の恋」というフレーズが登場するため、過去の恋であることも想起させる」と、解釈の幅を確保する言い方をしている。しかし、現在の視点が「あの日の恋」と言える状態は、たとえ現在も継続中の同一の恋愛対象であっても、その恋は「あの日の」それとは質的な異なりが自覚されているという点になるう。

(18) 前掲注(2) 榎本論文。

(本学教授)